
鏡

堂山鉄心

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

鏡

【コード】

N2031C

【作者名】

堂山鉄心

【あらすじ】

俺には何をやっても絶対勝てない幼馴染の真一がいた。俺は真一に憧れ、真一を追いかけ、そして諦めた。ところが2番目の男が恋をしたとたん、物語は転がり始める。

鏡 1

1

頼む・・・

俺まで回してくれ・・・

「きたーっ。ここで正志っ！」

9 回裏1アウト、ランナー1 2塁。

3対4の1点負けている状況で、同点のランナーである山下に続き、2番の田中がフォアボールを選んだ。

1発打てば逆転サヨナラ。

「正志っ！決めるっ！」

言われなくても決めてやる。

今日こそは・・・

今日こそは俺が・・・

ここまでチームを引っ張ってきて、今日は指先の血豆を潰したために打ち込まれた、エースで4番の真一の手を煩わすつもりなんかない。

見る・・・相手のリリーフピッチャーは大したタマ数も放ってないのに、緊張から口を開け、肩で息をしているじゃないか・・・

そいつはセットポジションから何度もプレートを外し、その度に帽子を取り、額の汗を拭う。

打てる・・・

フォアボールの次の初球。

教科書通りの狙いは見事に的中し、ピッチャーの投げた高めの半速球を俺はフルスイングで捉えた。

鏡

鋭くラインドライブの掛かった打球は、一步も動けなかったセカンドの頭上を越え、ライト・センター間の青い青い芝生の上を転々

と転がっている。

よし！ いける！

俺が1塁ベースを回った時、2塁ランナーの山下はすでに3塁を遙かに回りホームベースを指していたし、ようやくライトがボールに追いついたときには、同点のホームを踏み、俺はとっくに2塁を回っていた。

逆転サヨナラ3ベースヒット。

でも、田中の方が先にホームを駆け抜けたら記録上は2ベースなんだよなあ・・・いや、俺の足が田中に負けるはずがない・・・

3塁に滑り込もうとしたところで一際大きな歓声があがった。

ちえ・・・

やっぱりいくら俺の足が早いからって、バッターとランナーじゃ、そもそもスタートが違うか・・・

俺がスライディングをやめ、情性で歩きながらホームベースの方へと視線を移したとき、ホームベースの手前で転がっている田中に、ようやく中継から帰って来たボールでタッチをする相手キャッチャーが目に入った。

え・・・

何が・・・

そのまま3塁ベースを踏み、呆然とした。

田中が・・・転んだ・・・？

そんな・・・俺の・・・逆転サヨナラ・・・が・・・

真夏の暑さも周りの風景も何も感じない俺の意識を、更に一際大きな歓声が揺り動かした。

周りの選手達の視線を追った先・・・

レフトスタンドの中段辺りで大きく跳ねる白球が見えた。

鏡 2

2

「清水、92点だ。よく頑張ったな。」

今回のテストは楽勝だった。

みんなの拍手の中、照れ隠しに頭に手をやりながら答案用紙をもらいに行く。

「かぁー・・・またかよ。正志。」

「ずりいぞ。正志。」

「清水、よく頑張ったな。この調子で宮田に置いていかれないようにしなくちゃな。宮田、96点だ。」

宮田真一。

正に文武両道。こいつのお陰で俺は小学生の頃から何でも2番だった。

ついたあだ名が、当時の人気コミックのキャラクターから取った

『ミスタ・セカン』

つまり2番目の男って訳だ。

しかし、普通なら悔しくて悔しくて夜も眠れそうに無いこの状況も、相手がこの真一じゃ仕方がない。

真一は家が隣の幼馴染なんだし、それになんて言っても俺の1番の親友なんだから・・・

初めて真一と会ったときのことは今でも鮮明に覚えている。

それは、俺が6歳の春、もうすぐ小学校に上がり、新1年生になるうという時だった。

「正志・・・もうすぐな、隣に友達が出来るぞ。」

俺が大好きなカレーライスをはお張っている時、ビールを飲むコップを置いて父さんはおもむろに切り出した。

「友達……?」

「実はな、父さん達の友達でもあるんだ。」

いきなり何を言われてるのかよく分からなかったが、『父さんの友達』と云う、非常に理解しにくい言葉を言われたことははっきりと覚えている。

「お母さんのお友達でもあるのよ。」

いつになく、両親揃って上機嫌なのはよく判ったが、やはり父さんや母さんの友達というのは大きな違和感を俺に与えた。

もちろん今なら分かる。

父さんと母さんは大学時代に付き合いだしたそうだが最初はグループ交際のようなもので、そのうち父さんの友達の宮田……つまり真一の父親と、母さんの友達で当時原田という、今の真一の母親も同じく付き合いだしたのだそうだ。

「宮田はなあ……父さんの高校時代からの親友で……」

この時から現在に至るまで何度も聞かされてきたこのセリフは、この時が初めてだったように思う。

俺は自分で言うのもなんだが、幼稚園までは何をやらせても1番で、明るくて友達も多い、クラスの人気者だった。

それに比べて初めて会った真一の印象は、マジメで大人しそうで、これで本当に大丈夫かなあ……とこっちが心配になるほどだった。ところが入学式が終わり、通常の授業へと徐々に移っていくにつれて事情が変わってくる。

真一は、今まで同い年のヤツにはどんなことでも負けたことのない俺と同じくらい……いや、今から思えばその当時から全てにおいて俺より上だったのかもしれない。

それをはっきり自覚させられたのが、体育の時間のかけっこだった。

鏡

俺と真一は背の高さもほとんど変わらず、並んで一緒に走る事になったのだが、その時俺は、初めてかけっこで他人の背中を見て

走る・・・と、いう体験をした。

負けを知らない人間というのは、例えそれが幼い子供であっても同じだ。

とにかく負けたことが理解出来なかった。

そして次には負けたことへの言い訳を探した。

今日はなんだか調子が悪い・・・

ところが日が変わっても結果は変わることがなかった。

今日はあまりやる気が起きなかった。

今日は朝ごはんは俺の嫌いなピーマンが入っていた。

今日は天気が悪い。

今日は・・・

今日は・・・

「清水・・・宮田さえいなきゃ学年でさえも1番なのにな。」

「真一は特別だし、俺の親友だから良いんだよ。でも他のやつには絶対負けないよ。」

そうなんだ。

真一は俺の親友で、特別な存在なんだ。

だから真一はしょうがない。

俺は真一の背中なら見続けても構わない。

かけっこで負けて以来、跳び箱も縄跳びも真一には敵わなかった。

それだけじゃなく、テストの点さえ次第に離されていく。

俺は真一に憧れ、真一を目標に頑張った。

2番でも良い。

でも3番になって真一に離されるのだけは嫌だった。

鏡 3

3

「正志君は本当に良く食うなあ。」

「それだけでもんね。真一君に勝てるのは。」

クリームシチューを取り分けながら俺の母親が笑う。

「あら・・・そんなことないわよ。正志君は面白くてクラスでも一番の人気者だつて先生もおっしゃってたわよ。」

「そうなのよ・・・大して役に立たないことだけは得意なのよねえ。」

夜、部屋に戻つて鏡を見る。

そこに映っているのは、クラスの人気者という役回りを必死の思いで演じ続けている2番目の男だ。

暫くして今度は窓を見る。

この窓とほんの少しの空間を隔てた先にある窓。

その先には真一がいるはずだ。

何をしているんだろう・・・

俺はまるで恋する女の子のように、狂おしいまでの気持ちで真一のことには想いを馳せる。

寝転がって漫画でも読んでいるか？

それともゲームでもしているのか？

時々、難しい本を読んでいることはあったが、俺は真一が勉強しているところなど、ほとんど見たことがない。

敵わない・・・

世の中には稀に天才と呼ばれる者がいるのだそうだ。

「宮田は天才タイプ。それに比べて正志は努力の人だよな。」

完全に別格扱いの真一に対して、俺は庶民のヒーローなのだろう。

鏡

努力はする。

でも、真一に対抗するのはほとんど諦めた。

鏡の中の男は所詮2番目の男なのだ。

しかし、3番目の男にならないための努力をしているに過ぎない。そして俺は眠りに就く。

ベッドの中で俺は時折真一になって遊んだ。

テストの結果発表。

体育の時間。

そしてクラブ活動。

小学校のかけっこで、真一になって一番でテープを切る。

中学の時の球技大会で、相手チームをノーヒットに押さえた。

廊下の壁に張り出された実力テストの結果発表を、興味なさそうに横目で確認し、颯爽と歩き去る。

弱いものには優しくしてやり、乱暴者には言葉で諭す。

夢と現実の境目では俺は万能だった。

真一は万能だった。

朝、目が覚めたら俺はやはり俺だった。

鏡 4

4

高校生になった俺たちは当然のように野球部に入る。真一は、シヨート兼控えのピッチャーで1年からレギュラーを張り、俺はベンチからそれを応援した。

「正志は1年からベンチ入りかよ・・・やっぱり俺らとはモノが違うよな。」

高校に入ってもやはり真一は別格だった。皆にとっては、どうやら羨む対象にさえならないらしい。もちろん、それは俺にしたところで同じなだけ・・・

ただ、他のヤツらと決定的に違うのは、俺にとって真一の活躍は羨むどころか誇らしくさえあったことだ。

『どうだ？真一はこんなにも凄いヤツなんだぞ。』

真一の活躍に心が躍った。

真一が打てば自分のことのように嬉しかった。

逆に真一が打たれたときにはどうしようもない無力感に襲われた。

真一が通用しない。

それは自分などは全くの論外なのだという証拠を突きつけられたに等しかった。

真一がいる限り2番であることは仕方ない。

でも、3番になることだけは嫌だった。

夜、一人で鏡を見る。

そこに映っているのは清水正志という2番目の男だ。じつと見る。

鏡の中の自分の目だけを、射るようにつめる。

少し、赤い血管の浮き出た白目に囲まれた黒目の部分。

鏡

よく見ると真ん中の瞳を中心に放射状に細かい線がびっしりと広がっている。そして少し離れて見ると、黒目全体に俺の顔が映っている。恐らくその映っている顔の中の瞳には、更に俺の顔が映り、その顔の中の瞳にも恐らく・・・

あまりにもじつと目を見開いたまま見つめ続けていたせいで自然と涙が溢れて来た。

何故、ここに映っているのは清水正志なんだろう。

これが宮田真一だったらどんなに良かったか。

真一になりたかった。

そう・・・俺は真一になりたかったんだ。

苦しかった。

辛かった。

真一に憧れ、真一を追いかけ、真一になれずに諦めた。

俺が真一だったら・・・

夢の中のように真一になって自由に遊べたら・・・
ハデなフラインプレーなどではなく、素人には分からないような難しいバウンドのゴロをなんなく捌き、当たり前のような顔でベンチに引き返す。

クラスの中でも決して自分からは目立とうとせず、さりげなく学年トップを守り続ける。

冗談でクラスを沸かすことはないが、恋や勉強などの真剣な相談には親身なって乗ってやる。

ん？

そうか・・・

こうやってなれば良いんだ。

俺はいつの間にか真一になって遊んでいた自分に気づいて驚いた。

鏡
涙でぼやけた視界に映る鏡の中にはさわやかに笑う真一の顔があった。

鏡

2年になった俺は、3年の正捕手である岩井さんの怪我のこともあり、控えの捕手番号である12番という数字を背負ったまま、スターティング・マスクを被ることが多くなった。

実は大会前の背番号発表の時には、岩井さんは怪我で捕手という激務は困難な状態であり、実質的な正捕手はすでに俺であったと言っても過言ではなかった。しかし、年功序列というのは意外に根強いもので、いくら監督とはいえ、他の部員の手前もあり、3年生のプライドというものを完全に無視することは中々出来ない。

しかし、その中においてさえも、真一は堂々とエースナンバーの1番を背負い、それについては誰も何も言わないばかりか、むしろ当たり前だと感じているようだ。

そんな春・・・

準々決勝で真一は、連投の疲れからか四球を連発し、ストライクを取りに行つたところをもの見事に狙い打たれた。

「お前何やってんだ。正志。」

伝令にきた岩井さんは真っ直ぐ俺の目を見て怒鳴つた。

「宮田。大丈夫だ。まだタマは走ってる。コースに散らしてやれば充分抑えられるぞ。」

野球というのはメンタルなスポーツだ。

マウンドに立つピッチャーを動揺させるようなことは絶対にしてはいけない。バッターを抑えれば、それはピッチャーの手柄であり、打たれた場合はキャッチャーの責任になる。

「こんな時のために幼馴染のお前がマスク被ってたんだ。お前がしつかりリードしないでどうするんだ！ くそ・・・俺の怪我さえなけりや・・・」

吐き捨てるような言葉を残して去っていく岩井さんの背中を見ながら「大丈夫だ・・・正志。どこでも構えてくれ。俺はお前のミットだけを見て投げる。」

この時の俺の心境が分かるだろうか？

こんな言葉に対しても、粹に感じたりして感情に流されてはいけないのがキャッチャーだ。

真一の言葉は確かに勇ましいが汗の量が半端じゃない。明らかにスタミナ不足だ。

「分かった。もう迷わないよ。俺の構えたところに思いつきり投げ込んで来い。」

真一の背中をポンつと1つ叩き、足早に戻っていきながら俺の頭はフルに回転していた。今の中途半端なストリートは通用しない。さっき打たれたスライダーで空振りを取ることも難しそうだ。カーブでカウントを稼ぎ、ストリートで勝負・・・と思わせておいて、内角低めのスライダーで内野ゴロを打たせる。これを本線で考えながら後はバッターの動向を観察しながら冷静に判断していくしかない。

そう、まずはアウト・ローに大きなカーブで・・・

鏡 6

6

正志のやつ・・・

あんな岩井さんの言うことなんて気にしやがって・・・

俺達はいつも一緒にやってきたんだ。

あんな昨日今日の付き合いしかない先輩に何が分かるって言うんだ？

分かってるよ。

何も言わなくてもお前の考えてることくらい手に取るように分かる。

ほら・・・

ばつちりアウト・ローギリギリにカーブを決めてやった。

大丈夫だ。

お前の配球に間違いなんかあるもんか。

どうだ！

さっきのカーブで身体が泳いだせいでイン・ハイの速球に手も足も出ない。次のストライクからボールになるアウトコースのスライダーに手を出せばよし。ダメでも最後のイン・ローで・・・

「何であそこでカーブなんだよ！」

え・・・

何で・・・って岩井さん・・・

あっ・・・だめだ、だめだそのカーブはっ！

「わあああああああっ！」

夢・・・か・・・

身体中が痛い。

昨夜さんざん泣き喚いたせいで、喉も焼け付くようだ。

俺はまた真一になつてたのか・・・

「くう・・・」

やはり・・・

やはり岩井さんの言うようにあのカーブが間違っていたのか・・・
「違います。自分のコントロール・ミスです。」

「ばかやろう！そんなことあ分かつてんだ。それより握力の落ちたお前に細かいコントロールで勝負させたことを言ってるんだ！そんなことも見抜けないで何が正捕手だ！」

返す言葉がなかった。

確かにその前から真一のコントロールは怪しくなっていたし、あの場面はそういうことも含めて配球を考えるのがキャッチャーの仕事だ。しかし・・・あそこで他に何を投げさせろって言うんだ・・・考えても仕方の無いことをグルグルと考えた。

ああ・・・俺が真一だったら・・・

あそこでもう少し慎重に・・・ボールになつても良いくらいの気持いで丁寧アウト・ローに向けて・・・

次はイン・ハイの速球だ。

ん・・・全く反応出来ないじゃないか？

じゃあ、お次はこのスライダーで・・・

ほら・・・正志。やっぱり俺達は最高だ。俺達なら甲子園に行つたつて誰にも引けをとらないぞ。

『彗星のように現れたキラ星・宮田真一。甲子園で大活躍の2年生に真の文武両道を見た。』

マスコミだつて俺を放っておかないかもな・・・

その後、俺はプロのドラフトを蹴つて東大の文一に入る。東大初の六大学制覇だつて夢じゃない。

あははははは・・・

誰も俺を止めることなんて出来ないんだ。

宮田真一は万能なんだから。

鏡

「あんたねえ・・・練習は良いけどいつたいつ勉強するの？」

「しょうがないじゃん。母さんだって見たる？俺も真一も明らかにスタミナが足りないんだよ。帰ったらちゃんとするから。」

「それは真ちゃんの問題でしょ？それに真ちゃんは何もしなくても学年で1番だけど、あんたは必死でやってやっと2番じゃない？真ちゃんが走ってる間に勉強した方がよっぽど良いに決まってるよ。」

「真一が走ってる時に勉強？ただでさえ真一の方が上手いのにこれ以上離されるわけにいくかよ。」

母さんとの噛み合わない会話を適当に切り上げて、俺は雨上がり
の道路に飛び出した。

「よお。」

真一はすでに家の前でアップに余念がない。

恐らくさっきの会話も聞こえてたはずで、俺は照れくさいのを誤
魔化するためにワザと無愛想に声を掛けたんだけど、余計なことを言
わないのも真一の良いところだ。

「よし。見てろ・・・夏はぜってえー甲子園まで行つたる。」

強く自分に言い聞かせ、両の太腿を平手で2回叩いてから走り出
した。

真つ直ぐ前を向いた目線の先にははつきりと甲子園が見えていた。
上体はやや前傾させ、ストライドは幾分か広めに取り、呼吸は自然
に任せて無理な方法は取らず、出来るだけ大量の酸素を取り込むこ
とだけに集中する。

余計なことは考えるな。

俺達には光しか見えない。

ともすれば置いていかれそうになる真一のペースに必死で食らい

ついでいく。

安心しろ。真一。俺はお荷物なんかにはならないぞ・・・
公園の葉桜を過ぎて土手の堤防が上がっていく。後は川を見なが
らひたすら脚を動かす。

右・左・右・左・・・

土の上を自分の足先だけが交互に現れては消える。
だめだ。

気が付いたら下を向いていた。

明日を見つめる。

前を向け。

「転がる前に、ストレッチしとかなきゃ筋肉が固まるぞ。」

息も絶え絶えの俺を横目に真一はストレッチに余念がない。

「分かってるよ。」

俺もノロノロと動き出しながら精一杯強がってみせる。

「なあ・・・真一。お前さあ・・・」

「ん？」

「・・・いや、いい。悪い。何も無い。」

「何だよ。そこまで言っただけ隠すなよ。」

「いや・・・」

何故こんな話を始めたのか・・・

やはり酸欠の頭で話すとロクなことではない。

「誰にも言つなよ。」

とは言え、ここまで来たらもう言っただけじゃ済まない。いや、む

しろ俺はどこかでそれを望んでいたのか・・・

「お前さあ・・・岸谷どう思う？」

「岸谷？ 岸谷弥生か？」

「うん・・・あいつ結構可愛いくな？」

「ん？ なんだ正志、弥生のこと好きなのか？」

「弥生とか下の名前呼び捨てにすんなよ！」

「悪い悪い。岸谷なあ……そういやあ結構可愛いかもな。」

「だろ？俺結構ヤバいかも……」

「ま、女も良いけど、野球も頼みますよ。清水さん。」

「分かってるよ。んなこたあ……」

それから俺はいかに弥生が優しく、いい香りがして、可愛いかを真一に向かって延々と話した。

「制服の上からじゃ分からないけど、あいつ結構エロい身体してるだよなあ。」

真一は大した興味もなさそうに時々肯きながらも「さ、身体が冷える前に帰ろう。」最も真一らしい答え方で話を中断した。

言われてみればすっかり冷えた身体に夜の土手に川風が冷たかったんだけど、それよりも俺はその態度にちよっぴり不満だったんだ。とは言え、やっぱり真一に遅れないように必死で脚を動かすうちに、いつしかその不満も消えていったんだけど……

毎朝5時に起きる。

顔を洗って眠っていた時のジャージ姿のまま飛び出す。

この朝練前の早朝ランニングと、放課後の練習が終わってからの夜のランニングは確実にスタミナを蓄えることが出来る。

5時を過ぎれば辺りはすっかり朝の景色だ。この季節になれば吐く息ももう白くはない。俺達は毎朝・毎晩、モノも言わずにただひたすら走った。

走るにより分かったのは、酸欠の頭では真一になって遊ぶことが非常に簡単に出来るということだ。

今までは、本人の目の前では真一になって遊ぶのは難しかったんだけど、走っているときならとても簡単なんだと分かった。どんどん走って息が苦しくなってきたとき、すっかり真一になった俺の横を走っているのが正志・・・つまり俺に見えて驚いたことも1度や2度のことじゃなかった。

「でな・・・弥生がそのとき・・・」

それらとは別に、休憩しているときはすっかり自分に戻って色んなことを話した。

「うん。正志に言われてから何となく岸田に目がいくようになったんだけど、確かにあいつ可愛いよな。お前が惚れるのも分かるよ。」

最近はやうやく真一も弥生の魅力が理解出来てきたみたいで、俺としても何だか照れくさいような誇らしいような変な気分だったが、当然悪い気がするはずもなかった。

「俺な・・・決めたよ。甲子園を決めたら告ることにした。」

「マジかよ。んじゃ益々頑張らないとな。ってか、俺も責任重大か・

・・・」

「今までみたいにお前だけに任せておかねえよ。しっかりアシストすつからな。やったるうぜ。」

「うん。期待してるよ。マジで。」

朝と夜のランニングを始めてから、最初の頃こそ溜まった疲労でキツかったが、慣れてくるにしたがい明らかに俺達は変わっていった。もちろんそのことは先輩や監督にも分かる。俺達は他のやつらに比べて、朝練での最初の動きが段違いだ。そして放課後の練習でも余裕が出てきた。余裕が出てくれば練習の質が変わる。そして、俺達が変われば、みんなもそれにつられてチーム全体のレベルが上がるんだということが分かった。

俺達は強くなる・・・

そのころにはほとんどの部員が確信をもっていたはずだ。

日課のランニングを終え、家に帰るともう何もする気が起きない。決して大げさではなく指先一本だって動かしたくないほどだ。

「早くシャワー浴びて勉強しなさい。」

分かっている。

分かっているんだ。

いくら野球が上手くなったって、それで成績が落ちるようなら俺自身が納得しない。

3番目の男になってしまふのは絶対に耐えられそうにない。

俺は疲れた身体に気合を入れて立ち上がるとシャワーを浴び、カバンの中を見ることもなく手を突っ込み、最初に触った教科書を引っ張り出して無理矢理開いた。たまたま取り出された現国の教科書に併せ、参考書とノートを取り出し活字を追う。

すると教科書に書かれていたのは、最初の頃こそ意味を成した活字であったのに、少しずつ象形文字や子供の落書きのような意味のない図形に変化していき、最後は真っ白な紙になるくらいならまだマシな方で、時には象形文字が躍りだすことさえあった。

だめだ・・・

真一は絶対成績は落とさない。

それだけを気付け薬のように唱え、無理矢理に文字を頭に叩き込んでいく。

弥生・・・

見てろよ・・・

お前を甲子園に連れて行ってやる・・・

ほんと？

ああ・・・任せとけ。

誰も俺のタマを打てるやつなんていないんだから・・・

俺は正志の構えたミットだけ見てりゃ良いんだ・・・

岩井さんなんて関係ないね・・・

弥生・・・愛してるよ・・・

うん・・・私もよ・・・し・・・ん・・・ちゃん・・・

「ねえねえ・・・山下が、夏は絶対甲子園だあ！ って言っただけ
どお・・・実際のところはどつなの？」

心臓が飛び出るかと思った。

朝・晩の練習に加えて、勉強にまで追いまくられている俺は休み
時間などはほとんど寝て過ごしていた。

ところが今日はたまたま起きていたんだけど、起きていた・・・
というよりは、窓の外の方を向いて目を開けたまま眠っていたよう
な状態で、そんなときに突然弥生に話しかけられ、俺の心臓は車の
エンジンのように激しくピストン運動を始めた。

「お・・・おう・・・大丈夫だよ。任せとけ。」

「あたしの友達で聖蘭行ってる野球オタクから聞いたんだけど、宮
田ってマジ凄いなって？」

「うん。真一はマジですげーよ。」

「岸田あ・・・実は正志だって相当すげーんだぞ。今度の雑誌の取
材で2人とも取り上げられんじゃねーか？」

横から割り込んできた田中が言ったのは、先日、高校野球を主宰
している新聞社から学校に申し込まれた取材の話だ。

「えーっ！清水雑誌に載るの？」

「さあ・・・学校に申し込みがあったらしいけど、俺ら詳しいこと
は聞かされてないからな。それにメインはもちろん宮田だしな。」

「へえー、でも清水も候補くらいには上がってるんでしょ？・・・
ならやつぱり凄いな。ちよつと放課後、練習とか見に行つてみ
ようかな・・・」

どつするよ・・・俺・・・

弥生が見に来るよ・・・

困惑しながらも口元が緩むことを止められない。

「真一っ。どこ言ってたんだよ。」

「どこって・・・トイレだよ。」

「ばか。シヨンベンなんかして場合じゃないぞ。今日な・・・弥生が来るぞ。」

「え？正志んちか？」

「ばかやろう。来る訳ねえだろ。練習だよ。放課後練習見に来るつてよ。」

「なんだ・・・練習かあ・・・まあ、それじゃあ俺は清水さんが張り切り過ぎて怪我とかしないように祈つときますわ。」

「ばか。チャカすなよ。ってか、俺どうしよう・・・真一。」

「普通にやれば？いつも通り。変に意識するとマジで失敗するぞ。」

「そうか・・・そうだよなあ・・・よし。頑張るぞっ！」

その日の俺は、真一に言われたように、やはり少し張り切りすぎていたのかもしれない。おかげで夜のランニングでは、危うく真一に置いていかれそうになっただくらいだ。

んでも、やつぱり可愛いよなあ・・・

フラフラの頭で無理やり開いた教科書は、俺に何も訴えてくるものがなく、気が付けば練習を見に来ていた弥生のことばかり考えていた。

友達と手を叩いて笑っている弥生。

友達の耳元で何かを小声で囁いている弥生。

時折グラウンドに向けられる真剣な眼差しは、俺でなくともドキリとさせられるはずだ。

絶対勝つぞ。

勝って弥生を甲子園に連れて行ってやるんだ。

俺が・・・

俺がこの手で・・・

頑張ってる・・・

おう、任せとけ・・・俺が絶対お前を甲子園に連れて行ってやる・

・

ホント？ 絶対だよ・・・

うん。約束だ・・・

嬉しい・・・真ちゃん・・・

鏡を見る。

鏡の中に映っているのは2番目の男だ。

じつと見る。

『昨日練習見に行ったんだよあ。知ってた？』

『うん。田中達から聞いたよ。』

『ホント？』

あの時の問いはどういう意味だったんだろう？

ホントに田中に聞いたのか？それとも、アンタがこつちをチラチラ盗み見ていたのを知ってるよ……って意味だろうか？

じつと鏡を見る。

鏡の中の俺は何も答えない。

何も答えてくれない。

『確か宮田って足とか凄く速かったよね……ほら、こないだの体育祭の時のリレーでもアンカーで宮田が2人ゴボウ抜きにして優勝したし……』

『ああ……速いよ。』

その時俺は第一走者で、トップで帰ってきてたんだよ……

『初めてちゃんと見たんだけど、宮田ってやっぱり凄いね。あたし野球とかイマイチ分かんないんだけど、何か他の子らとはどっか違うって感じ。』

『そうだな……』

他の子？

それは俺のことも含んでいるのか？

『ねえねえ……でさ……一緒に行ってた真奈美いんじゃない？あの子どっと思っつ？』

『どつって……』

『可愛くない？あの子清水のことカツコイって言ったよ。』

『アタシが教えたとか言っちゃだめだよ。内緒なんだから。でも真奈美すつごい性格も可愛いし、アタシ、イチオシ。今なら絶対お買得。』

『いや……俺は……』

『そかぁ……清水は甲子園一直線だもんね。でも、もったいないなあ……一応覚えてて。真奈美絶対お勧めだから。』

『うん……』

『で……ねえ……宮田って……今、好きな子とかいるのかな？』

それはどういう意味だ……

どういう意味なんだ？

何でも2番の俺が真一に負けてないものが実はいくつがある。

メシの量と友達の数……確かに母さんの言う通り、それは本当につまらない、生きていくのに大して役に立たないものばかりかもしれないけれど、その大したことないものの中で唯一まともなものが、バレンタインのチョコレートの数だ。真一も決してモテない訳じゃないんだけど、バレンタインのチョコレートの数で言えば、大抵俺の方が多かった。もちろん、俺の場合は友達とか友達の彼女とかはつきり義理だと分かるものも多かったけど、それらを差し引いても多分負けてない。でも、色とりどりにラッピングされた綺麗な100個のチョコレートなんかよりも、俺はたった1つ、お前の笑顔だけが欲しいんだよ……

弥生……

『……今、好きな子いるのかな？』

鏡の中の俺は涙を流していた。

弥生は真一のことを好きなのか……

面倒見の良い弥生のことだから、他の誰かのために聞いてきたってことも考えられない訳じゃない。

でも、でも……あの時の少しはにかんだ表情を鏡の中で涙を流している俺が知っている。

だけどまだ諦めないよ……

試合終了の音が掛かるまで、俺は決して諦めたりしないんだ……

なあ、真一……

俺たちはずっとそうやってやってきたんだもん……

「小橋たち3年には最後の大会になる。レギュラーは実力もさることながら、日頃の努力も最大限に加味して厳選したつもりだ。背番号を渡された者は渡されなかった者の分まで悔いを残さないようなプレイをして欲しい。そして背番号を渡されなかった者も、万が一何かがあった時には即対応出来るように決して準備を怠らないこと。それとやはり悔いの残らないように自分達の代表であるベンチ入りのメンバーを心の底から応援して欲しい。」

夏の予選を前に、練習が終わった後、監督からレギュラー9人とベンチ入りメンバーの発表があった。

「まずは1番。エースナンバーはやっぱりお前しかない。頼むぞ宮田。」

「はい。ありがとうございます。」

予想通りの結果に惜しみのない拍手がおこる。

「続いて宮田のタマを受ける2番だが……」

絶対正志だよ。どう考えたってお前しかないって……

でも岩井さん最後の夏だしな……

春だつて、監督は怪我のせいにしてたけど、完全に実力で取ったレギュラーだったじゃん。それは俺達が一番分かってるぞ……

放課後の練習が始まる前、3年の部員がいない時に交わされた会話。

背番号の発表はいつだつてやっぱり緊張する。みんなこのために毎日汗や泥にまみれて、砂を噛むような思いで頑張ってきているんだ。誰だつて、スタンドで応援するために血の滲むような努力をしてきた訳じゃない。

頼む……

「・・・2番だが・・・清水、毎朝、毎晩、宮田と走ってるらしいな。春の大会が終わってから一番伸びたのがお前だ。宮田のタマ、しっかり受けてやれ。頼んだぞ。」
「気付いている。」

岩井さんや、何人かの3年の射るような視線には当然気付いている。しかし、それをねじ伏せるようなこの高揚感の前には何もかもが無力だ。もちろん期待はしていた。俺しかないという自負もないではなかった。しかし、頭で想像するのと、実際にこうやって監督の手から背番号を受け取るのでは雲泥の違いがあった。

「続いて3番・・・ファーストベースを任すのは・・・」

「よし。絶対甲子園行くぞ。」

小声ではあるが、珍しく真一が興奮気味に話しかけてきたことも、それに拍車をかけた。

「・・・で、15番。田中だ。スタンドの仲間たちの分までベンチからしっかり声出せよ。」

「は・・・はい！　ありがとうございます！　頑張ります！」

その夜のランニングはやはりいつものものにも増して気合が入っていた。分かつてはいるのだが、ついつい飛ばしすぎてしまう俺を真一が苦笑交じりに抑える。

それでもすっかりペースを乱してしまった俺は、いつもの公園に着いたときにはすでに息も絶え絶えの状態だった。

「悪いな・・・分かつてるんだけどな・・・」

「しょうがないよ。俺も初めて1番もらったときは興奮で眠れなかったもんな。」

「はは・・・ありえない。お前がそんなことで興奮なんかするかよ。」

「何言ってるんだよ。昔から時々感じるんだけど、正志一体俺のこと何だと思ってるんだ？　俺だって普通の高校生なんだぞ。」

「ん・・・そりゃそうだけど・・・」

「正志は俺のこと、何も努力しなくても何でも1番みたいに言うじゃないか。俺だってこう見えて結構努力してんだぞ。だから報われた時にはやっぱり人並みに嬉しいんだ。」

「そう・・・なのか・・・」

「当たり前じゃないか。自分でも喜びの表現が苦手なの分かってるから、誤解されてもしょうがないとは思うけど、正志だけはちょっとくらい理解してくれても良いんじゃないか？」

「すまん・・・そうだよな。考えてみりゃ当たり前のことだよな。」
知らなかった。

毎朝・毎晩一緒になって走ってるんだ。ほんの少し考えりゃ・・・いや、考えるまでもなく当たり前のことなのに分かってなかった。こいつだって、俺と同じ普通の高校生だったんだ・・・

その夜は夏日を記録した昼間の気温そのままの蒸し暑い夜で、川風は熱く火照った身体を全く冷めさせてくれる気配もなく、来るべき夏の大会の熱さを俺達に予感させた。

鏡 1 2

1 2

「・・・80点。この調子で頑張れよ。次、清水84点だ・・・どうした？甲子園も大事だが勉強はどうでも良いってわけじゃないだろ？大体同じ野球部の宮田は・・・」
落ちた・・・

ついに、というべきか・・・やはり、というべきか・・・2位から一気に落ちてしまった。

今までも各教科で一時的に3位になってしまうことは何度があったが、総合で3位になってしまったことはない。その各教科にしても今回のように5位などということはこれまでに1度もなかった。

3番目の男にはならない。

小学生の頃にたてたあの誓いが今破られた。

どうしよう・・・

なんだその顔は？

何故みんな笑っているんだ？

俺か？

俺のことを笑っているのか？

野球などに呆けて大事な勉強をないがしろにしていた大馬鹿者の凋落をクラスの全員が嘲笑っていた。

なんだこれは・・・

教室が・・・世界がぐるぐると回っていた。

空気が薄い・・・

真一、真一・・・そんな顔で俺を見るな。そんな目で俺を見下ろすな。お前だけは・・・お前だけは俺を・・・俺を見捨てないでくれ・・・

鏡

.....

なんだ・・・

夢か・・・

そうだよな。いくらなんでも俺が5番なんてありえないよな。

なあ、弥生・・・安心してくれ。俺は誰にも負けないから・・・
ん？真一・・・何してんだよ。おんぶなんて恥ずかしいからやめ
ろよ。おい、田中まで・・・意味分からんねえよ。お前ら・・・
ほら・・・真一・・・真一・・・次のカーブで・・・やよ・・・

ん・・・

白・・・ベッドか・・・

俺・・・は・・・

保健室のベッドで目を覚ました俺は意識がはつきりとしてくるの
につれて涙が溢れ出してくるのを止めることが出来なかった。何故
だろう・・・たかが1度のテスト結果くらい次でどうにでも取り戻
せる。分かってる。分かってるんだ。分かってはいるんだけどこの
気持ちを止めることがどうしても出来ない。

今はただ、この場に俺以外の人間がいないことだけがありがたか
った。

それにしても・・・

保健室の岩崎先生くらいいても良さそうなものなのに・・・

俺はまだ夢の中にもいるのだろうか？と考えたとたん、ガラッ
という音とともに岩崎先生が入ってきた。

「あら、目が覚めた？どう、気分は？」

「はい。大丈夫です。ってか俺は・・・」

「教室で急に倒れたんだって。宮田君たちが運んできてくれたのよ。
」

「ああ・・・そういえば・・・」

何となく頭の片隅のほうに微かな記憶の残滓のようなものを感じ

た時、チャイムが鳴った。

「今のって何時間目が終わったの？先生。」

急にあわてた様子の俺をチラッと見、「5時間目よ。でももう少しゆっくりしていきなさい。あなた少し疲れてるのよ。大丈夫、先生には私から言っとくし、ちゃんと放課後には解放してあげるから。」

「うん。すみません。」

「宮田君に聞いたよ。毎朝、毎晩クラブ活動が始まる前と終わってから走ってるんだって？甲子園目指してるんじゃないけど、何でもやりすぎはだめよ。」

そこで俺は気が付いた。

このままじゃクラブに行かせてもらえないかもしれない。

成績が落ちて、その上クラブまで休んだんじゃ何のために毎日頑張ってきたのか分からなくなる。

「でももう大丈夫みたいです。俺、いけますから。」

「クラブのことね。1日くらい休んじゃだめなの？」

「いえ、そういうことじゃなくて、ホントに俺大丈夫だから。」

「ふん・・・しょうがないわね・・・それじゃあ先生には私から、たんなる寝不足で貧血起こしたみたいだって言っておいてあげるから、もう1時間だけ休んでいきなさい。」

「ホント？ありがとう先生。」

「その代わり1回戦なんかで負けたら承知しないわよ。ちゃんと私を甲子園に連れていきなさい。」

「え？来てくれんの？先生。」

「何言ってるの。これでも毎回野球部の応援には行ってるんだから。春もスタンドにいたのよ。知らなかったでしょ？」

こんなところにも応援してくれる人がいる。

こんなことくらいで負けて堪るか。

今日からまた、野球も勉強も誰よりも努力してやる。

絶対に取り返す。

「だから母さんがあれほど言ったでしょ。勉強出来ないんなら野球なんてすぐに辞めなさい。」
家に帰って待っていたものはヒステリックに喚き散らす母さんの怒声だった。

「まあまあ・・・辞めることはないけどもう少し勉強も頑張った方がいいかもな。何でもバランスが大切だ。野球ばかりでも勉強ばかりでも良くないと思うな。」

「何言ってるのよ。野球ばかりは困るけど勉強ばかりだったら大歓迎です。大体お父さんは・・・」

「いや、そんなこと言って正志が勉強だけのもやしっ子にでもなったら・・・」

「もやしっ子の何が悪いの？身体ばかり大きくて頭からっぽよりはよっぽど・・・」

「聞けば正志たちは甲子園も夢じゃないそうじゃないか？甲子園だぞ、甲子園。」

「あんな進学校が甲子園なんて行ける訳ないじゃない。ああいうのはほんの一握りの・・・」

「ちよつと待て。お前は自分の息子の事も信じられ・・・」
成績が落ちるといふのはこういふことなのだ。

俺はとてもじゃないが聞くに堪えない両親の会話から逃げるようにさっさと2階の自分の部屋へと戻った。

そして鏡を見る。

鏡の中に映っているのは真一の顔だ。

真一は万能なんだ。

どんなに疲れていたってそれを理由に怠けたり休んだりしない。鏡の中の真一はにっこりと微笑み、ゆっくりと教科書を開いた。

鏡

待ちに待った夏の地区予選が始まった。

1回戦、2回戦と俺達は順当に勝ち進むことが出来た。

真一は4番ショートで出場し、見事に4番の仕事をこなした。その間ピッチャーは背番号6番を着けた普段はショートのレギュラーである3年の吉田さんが務め、2試合で12イニングを投げ3失点とまずまずの内容で、万が一の場合の控え投手としてのテストも充分に合格点だったといえた。

しかしウチとしては、やはりいくら毎日走ってスタミナをつけたとはいえ、春の大会の教訓を活かし、ピッチャー真一を温存出来たのが大きい。

そして迎えた3回戦。

エースナンバーが初めてこの大会のマウンドを踏むと、真一は6回まで見事にノーヒット・ピッチングをやった。エースの頑張りに奮起した打線の方もその回までに5点を挙げ、ほぼ試合が決まりかけた7回ツーアウトから打たれた初めてのヒットを機に8回からは再び吉田さんにマウンドを譲り、結局その試合は7対0で圧勝することが出来た。

大会が始まると練習は軽めのものに切り替えられる。もちろん俺と真一のランニングもお休みだ。

「ねえ清水・・・前に言ってた真奈美のことだけじゃあ、マジでどう思う？」

放課後、練習が終わるのを待っていた弥生に声を掛けられた。

「今はそれぞれどころじゃないんだよ。」

「分かってるよ。分かってるけど、ホントにすっごい良い子なんだよ。顔も可愛いし性格も良いし・・・あんな子他に絶対いないって。」

」

いるんだよ・・・俺の目の前に・・・

「うん。でもマジで今はそれどころじゃ・・・」

「ねえ・・・じゃあいつになったら返事くれる？それだけでも教えてあげなきゃ可哀相だもん。」

可哀相・・・か・・・

「実はな・・・俺、好きな女がいるんだよ。」

「ええっ！マジで？ウチの学校の子？」

「うん。」

「付き合ったりとかしてないよね？それだったら絶対アタシの耳にも入ってくるはずだし。」

「してねえーよ。大体そんな暇あるわけねえーだろ。」

「んじゃ、その子は清水がその子のこと好きなの知ってるの？」

「いや・・・知らねえよ。」

「でも、実はちよつとだけ気付いてたりして。」

残酷な・・・とても辛い会話だけど今更止めるわけにもいかない。

「絶対気付いてない。賭けても良い。」

「そうなんだあ・・・でも、それだったらすぐにでも告っちゃえばいいじゃん。」

「うん・・・でもな、だめだ。俺は甲子園を決めたらその子に告白するって決めてんだ。」

「そんなの甲子園とか言っていないでさっさと告っちゃえばいいじゃん。男だろ？」

少し唇を尖らせた表情も堪らなく可愛い。今すぐにもその唇に・・・

「うん・・・でもな、決めたんだよ。」

「男って勝手だなあ・・・そんなんでもし甲子園行けなかったら・・・あ、ごめん・・・」

「いや・・・良いよ。だからこそ絶対に負けられないんだ。絶対甲子園決めて俺の気持ちを伝えるんだ。」

「そかぁ・・・頑張れよ。真奈美にはアタシからちゃんとウマい」と言つとくから。ウマくいくといいな。」

その場で告白してしまいたい衝動と必死に戦いながら何とか会話を終えることが出来た。

その日の朝はいつもにも増して良く晴れ渡っていた。

「よう、ぜってえー決めるぞ。」

「おう。もちろんだ。」

あの真一が少し興奮してる。気合の入りがハンパじゃない。春の大会であれだけ焦がれた準決勝。

ここからは生徒も希望者に限り授業免除で応援に来ることが出来る。

『あつたりまえでしょ。絶対行くから死んでも負けんなよ。』

弥生・・・見てるよ・・・弥生。

「今日は暑くなるな。」

「おう。マウンドの上はハンパじゃねえーだろうけど、相手だって同じだ。お前が誰かに負けるなんて考えられねえ。」

「ま、頭ん中まで熱くなりすぎないように気いつけるよ。」

くそ・・・みんな真一かよ・・・

試合開始前の挨拶に両チームの全員がホームベース前に並ぶ。相手チームの視線は全員真一に向けられていた。

慣れていることとはいえ、決して気分の良いもんじゃない。

もうすぐ、こっちも向かせてやるから・・・

しかし、さすが強豪と謳われることだけはあり、試合は前半から投手戦の様相を訂し均衡していた。

しかしその中でも俺は3打席を終えて、2安打1四球1打点と絶好調だった。

今日はタマが見えてる。真一になるまでもない。

見てるか・・・弥生・・・

絶対お前を甲子園に連れて行ってやるからな・・・

しかし、3対1とリードで迎えた8回表、1アウトを取ったところで急に真一のタマにキレがなくなつた。

「ボール・フォア。」

ヒットのランナーを1塁に置いて真一は更にフォア・ボールを出した。

何だろう・・・

微かに感じた違和感。

しかし、それが何なのかが分からない。

「ドンマイ！打たせていくぞっ！ 1ダウンっ！」

俺の頭は急激にフル回転していた。急にボールのキレがなくなつたとはいえ、そこまで疲労している風でもない。いや、もちろん疲れていない訳ではないのだが、俺達は春の時とは違うんだ。ここはイン・ローのスライダーを引っ掛けさせてゲッツーで・・・

打球は、いわゆるゲッツー態勢で少し前進守備を敷いていたショートの前足の吉田さんの左を襲つた。

抜けた・・・

恐らく真一も同じ思いだったのだろう、カバーのためホームに向かって1歩踏み出したところで、名手・吉田さんが横っ飛びでその打球を抑えた。

助かった・・・

しかし、何とか2塁はフォース・アウトに取つたものの、さすがにファーストは間に合わず、ほっとしたのもつかの間依然2アウト13塁とピンチは続く。

「ナイス・シヨートっ！ 2ダウンっ！ しまつていこうっ！」

せめて・・・せめてここでマウンドに行くべきだったのだ。

明らかに普段と違う真一の表情に違和感を抱いたまま、俺は間抜けにも、そのままキャッチャーズ・ボックスに座り、その結果、真一は次の2番バッターにもフォア・ボールを出した。

2アウト満塁。差は2点。2アウトなら打った瞬間ランナーは打球を見ずにスタートを切れる。1ヒットで間違はなく同点の場面だ。「どうした？真一……」

さすがに慌ててマウンドに駆けつけた俺は励ますつもりが、逆に問いただしてしまった。

「すまん……ちよつとな……」

何だこの違和感は……

俺はそこで初めて違和感の正体を真剣に考えた。

「何隠してんだ？俺にも言えないことか？あつ……」

真一のユニフォームの右の腿の辺りに明らかに砂とは違う汚れがあった。

血……？

「お前指見せてみる。」

ミットで口元を隠し、ナインや伝令の岩井さんにも聞こえない声で言った。

「なんでもない……いや……すまん。頼む。せめて後一人だけ。黙ってくれ。頼む。」

俺はなんて問抜けなキャッチャーだったんだ。

この回から俺が受けていたほとんどのボールには真一の指先から出た血が付いていたはずなのに、それに全く気付くことが出来なかった。恐らく爪を割ったか、血豆でも潰したのだろう。ピッチャーの指先は本当にデリケートだ。ほんの少しの痛みや違和感だけでもボールに影響が出ることがある。

今の真一なら絶対吉田さんの方が上だ。しかし、このチーム相手に吉田さんが通用するとは限らないし、真一で負けるならある意味仕方がない。

「どうしたんだ？どつか痛いのか？」

岩井さんに知られる訳にはいかない。

「いえ、大丈夫です。何でもありません。」

真一がこれだけ自己主張するのも珍しい。ここは運を天に任せる

しかない。

しかし、再開された直後の初球、アウト・コースを狙ったボールが真ん中に入り、打球は無常にもさっきのファイン・プレイを嘲笑うかのように吉田さんの頭上を遙かに越えていき、それは満塁の走者を一掃する、逆転の2ベースヒットになった。

その後、真一の逆転サヨナラ2ラン・ホームランで何とか準決勝には勝ったものの、指先の感覚が戻らないまま登板した真一は決勝戦でも見事に打ち込まれ、俺達の高校2年の夏が終わった。

「なあ正志……」

いつものランニング・コースの土手に今日は2人とも制服のままで座っていた。

本当なら甲子園の準備で大忙しだったはずの今、一体何をすれば良いのか分からず、かと言って何もする気が起きず、ただぶらぶらと歩きながらここまで来てしまった。

「ん？」

「俺さあ……実は甲子園行ったら今年で野球部辞めようかと思ってたんだ……」

「え！マジかよ……って……実は俺も同じこと考えてた。」

「マジで？」

「うん……ってか、お前はまだまだ大丈夫だろ？俺なんかこないだ総合で学年5位まで落ちたんだぞ。」

「うん……実はな、悪い悪くすんなよ。俺は今回の正志の成績見てそうしようと思ったんだ。実際俺も最近ヤバくなってる。このままじゃ、絶対いつか誰かに抜かれるのも時間の問題なんだ。」

「お前は……って、大丈夫じゃ……なかったんだよな。そう言えば……」

「そうなんだ……」

真一も思ってたような特別な人間なんかじゃなく、俺たちと同じ普通の高校生だったんだ……

「俺ってさぁ・・・態度には出さないけど実は結構負けず嫌いなんだよな。」

「ま、そうなんだから。マジで最近まで知らなかったけど。」
そのことを知って以来、俺は以前ほど真一になることがなくなっていた。

「うん。・・・で、甲子園を最後に・・・って思ってたんだけど・・・辞められなくなっちゃまったなあ・・・」
「辞めらんねえなあ・・・」

それよりも俺には他に大きな関心事があった。
そう・・・

甲子園を決めたら告白・・・
そして以前ほど・・・の唯一の例外が弥生のことだった。

『ね・・・宮田落ち込んでなかった？』
それを同じ野球部の俺に聞くとということがどういふことが分からないくらいに弥生は真一のことを本気で心配していた。

「これからどうする？ 正志。」
「うん・・・」

「俺はここでお前が辞めたとしても何も文句はないぞ。 正志。」
「お前はやっぱり続けるのか？」

「この場で結論出すつもりはないけど、今の気持ちだけを言えば・・・んー・・・やっぱりこのままじゃ悔しいな。」

「そうか・・・俺も今は答出ねえや・・・ってか、そんなことより・・・」

「ん？」「
「ああーどうしよっかなあ・・・」
「何だよ。」

「はぁ・・・弥生だよ。俺、甲子園決めたら告白するって言っただじやん。負けることなんて全く考えてなかったもんよお。」

「負けることなんかこれっぽっちも考えていなかった・・・いや・・・本当は単に考えることから逃げていただけなのかもし

れない。

「ああ・・・そう・・・か・・・」
ん？

今のは何だろう・・・

「なあ、どうしたら良いと思う？真一。」

「・・・んー・・・そうだなあ・・・」

何だ・・・その表情は・・・
知ってる。

俺はこの表情を知ってる。

何だ？

俺は今味わってるこの違和感を以前にどこかで・・・

何だ・・・真一・・・何を隠している・・・

「ま、今日のところは帰ろう。俺たちは疲れてるんだ。こんなときに何かを考えてもロクなことにはならない。な、正志。」

言うだけ言うとさっさと立ち上がりこっちを見下ろした真一の瞳には・・・何か俺の知らない感情が映っていた。

鏡 16

16

あの瞳に現れた感情は何だ？

罪悪感？それとも憐憫の情か・・・

そこから導き出せる答えは一つしかない。

真一は何かを隠している。

何だ・・・

実は真一と弥生はすでに付き合っていて、俺だけが何も知らなかったなんて・・・

まさか・・・

いや、真一に限ってそれはありえない。

鏡を見る。

そこに映っているのは、今や2番目でさえないただの男だ。

弥生・・・

たったガラス2枚と、その間のほんの僅かな空間を隔てたところに、その男はいる。

無二の親友であり、俺が唯一背中を見続けることを自分に許容した男。

そして弥生の心を射止めた男。

真一の顔を思い浮かべながら鏡を見る。

この男だ。

いつも俺の前を走っているこの男だ。

誰にも負けず、挫折さえ新たな力に変え、それを人知れず努力で補いながら更なる進化を遂げていく。スポーツ・勉強・女・・・そう、誰にも負けない。誰にも負けちゃいけないんだ。来年の春こそ俺のこの腕で甲子園を掴んでやるからな・・・弥生。まぬけな正志なんかには言う必要はないよ。俺は特別なんだ。あいつだって納得

「真一、話がある。帰り待っててくれ。」
誰だ・・・

誰かが頭の中で呟いている。

「・・・分かった・・・」

誰かがマジメな顔で肯いている。

お前は誰だ。

大きな穴がぼっかり開いている。

顔の真ん中に大きな穴がある。

暑い・・・な・・・

汗が背中を伝い、流れ落ちていく。

窓の外には真っ黒な灰色の大きな虹が掛かっている。

誰かが俺の周りを飛び回り、離れ、また飛び回り、離れる。

羽虫が・・・

何も見えない目の裏で翅の音だけが煩く響き渡っている。

暑い・・・な・・・

「待ったか。」

真一はいつもと変わらずそこに立っていた。

「いや・・・」

俺の返事を聞くともなく踵を返し教室を後にする。

長い廊下。

食堂の窓。

風が・・・

俺達はいつもの土手を降り、川原に座って話していた。

「あのときのカーブが忘れられないんだ。」

「ん？ 春の話か？それはもう過ぎた話だよ。岩井さんだって覚えちやいないよ。」

岩井・・・誰だそれ・・・

顔のない男は喋り続けている。

「そういえば正志にはちゃんと謝ってなかったな。」

「ん？」

「感謝してるんだ。済まないとも思ってる。正志じゃなかったら黙っててくれなかっただろうな。」

「何の話だ。」

「いいよ。惚けたりしなくても。正志だから内緒にしてくれただよな。」

まさし・・・ないしょにしてくれただよな・・・

まさし・・・ないしょだよな・・・

まさしにはないしょだよ。

「まさしにはないしょなのか？」

「な・・・何を言ってるんだ？」

「見たんだよ。俺。」

何を・・・

何を見たんだろう。

「見た・・・のか・・・」

顔のない男が何かを喋っている。

「・・・で、甲子園が決まったら俺に告白するつもりだったらしいんだけど・・・」

ここは場所が悪い。

大きな石がゴロゴロしているところに手を置いているせいで、右手がじんじんと痺れてきていた。

「・・・で、付き合ってるのか。」

「うん・・・正志には悪いと思ったんだけど・・・」

俺はどこで間違っただろう・・・

やっぱりあそこはカーブじゃなくストレートかスライダーで・・・

2番は嫌だ。

2番は嫌なんだ。

1番がいい。

本当は1番がいいんだよ。

全部じゃなくていい。

たった1つきりでいいんだ。

他は全然ためでも、たった1つだけ誰にも負けない1番が欲しいだけなんだ。

苦しくて

切なくて

俺の前を歩くな。

俺に背中を見せるんじゃないっ！

弥生を抱いたのか？

それは俺のモノだ。

俺が見つけて俺が大事にしてたんだ。

俺のモノまで奪うのか。

全部何もかも持つてるじゃないか。

夜の川原に座り込んで星を眺めていた。

両手に抱えた大きな石は、それが夢でないことを物語っていた。

真一……

今も手に残る肉が潰れていく感触。

俺の幼馴染にして最高の親友。

俺は真一を目指し、真一を追いかけ、真一を諦め、真一になって遊んだ。

真一は俺の全てだった。

その真一は今、俺の両手で抱えた大きな石の下で、車に轢かれた猫のように潰れて冷たくなってしまった。

ぼつかり大きな穴が開いていた顔は全く原型を留めない真つ赤な爛れた肉の塊と化し、全てを掴み取った腕はただだらしなく両脇に投げ出されていた。

暑い・・・な・・・

川風に吹かれてやっと正気に戻った俺が取った最初の行動は、真一の死体の両足を持ってずるずると引きずっていくことだった。

真つ黒な灰色の虹は今や天空にまで駆け上がり、その姿をまん丸に変えて紫の月の周りを大きく縁取っていた。そしてそれに押しやられた満天の星屑は今や地平線にまで迫り、生暖かい腐臭を含む黄緑色の風が俺の周りに満ち満ちていた。

水際までずるずると引きずっていくと、ぼこぼここと黄色いメタンの泡立つ水面を破り、膝まで水に浸かってゆっくりと川の真ん中に向けて死体を押し出した。押し出された死体は水面をいくらも進まず、すぐに流れに吞まれて沈んでいった。

これで・・・

これで永遠にお別れだ。

もう、遊んでいるふりをして俺を欺き、横から何気ない顔をして1番をさらっていく真一という男はいない。

たった1つでよかったのに・・・

小学校・中学校・高校・・・

春休み・夏休み・冬休み・・・

思えばいつも隣に真一がいた。

共に喜び、共に悲しみ、共に生きてきた真一は、今はこの川の底で魚や海老、虫たちに顔の傷口を啄ばまれているかもしれない。

うつ・・・

突然潰れた顔にそれら無数の生物がたかっているリアルな映像が浮かび、俺は水面に激しく嘔吐した。

それは本当に激しく、これ以上ないほどに激しい嘔吐で、このまま内臓まで出て行ってしまっくんじやないかと考えたたん、その映像までもが即座に浮かび上がり、最後はすっかり胃液以外に出るものがなくなってもまだ水面に向かって吐いていた。

やっとのことで涙のせいで滲んでいた風景が元に戻り、嘔吐のために乱された水面にすっかり静寂が戻ると、月明かりに照らされた水面には涙を浮かべた真一の顔が映っていた。

何だ今のは・・・

俺は思わずその場で尻から川に落ちた。

膝まであつた水面がしゃがみこんだ両脇にまで達し、今にも真一の両手が川の底から這い上がってくるような気がして、俺は川原を目指し慌てて後ろ向きに逃げるようにして後ずさる。

その瞬間突然のフラッシュバックが起こった。

両手に抱えた大きな石を、一心不乱に俺に打ち下ろしてる俺。

バカな・・・

そこには真一はいなかった。

いや・・・

石を持って打ち下ろしている男こそ真一であつた。

俺は・・・

俺は俺を殺したのか・・・

混乱している頭のまま、びしょ濡れ姿で家に向かった。

俺は誰だ・・・

小さい頃からの記憶が蘇る。

そこには常に真一の背中があつた。

背中・・・

考えてみれば、俺が見つめていたのは、いつも真一の背中だった。

・

鏡

玄関を開けると、ただいまも言わずに2Fに上がった。

真一・・・

鏡を……鏡を見ることが出来なかった。

「もう……帰ってるんならただいまくらい言いなさい。」
母さんがノックもせずいきなり入ってきた。

「あら……真ちゃん……どうしたの……正志は……一緒に
やないの？」

言った母さんの顔は突然ぐにやりと歪み、それは見ている間に真
一の母親の顔へと変わっていった。

「あら……まーくん……どうしたの……真一は……一緒に
やないの？」

更に真一の母親の顔が歪み、天井が歪み、壁が歪み、俺は虚空を
彷徨っていた。

夢を……

夢を見ているんだ……

いつも通り、俺は夢の中で真一になって遊んでるんだ。
そして起きたらいつも通りに元の……

鏡に映る真一に向かって顔のない俺がいつまでも呟き続けていた。

了

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2031c/>

鏡

2008年11月7日07時15分発行